

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 11 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520403

研究課題名(和文)多和田葉子の文学におけるドラマツルギーの研究

研究課題名(英文)Study in Dramaturgy of Tawada Yoko's literature

研究代表者

谷口 幸代(Taniguchi, Sachiyo)

お茶の水女子大学・グローバルリーダーシップ研究所
・准教授

研究者番号：50326162

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：多和田葉子の作品の演劇化、並びに多和田本人による朗読会やパフォーマンス、インスタレーションに関する調査と分析から、多和田文学における演劇性の意味について考察を試みた。多和田作品の演劇化の状況については、戯曲の舞台化のみならず、小説を原作とした舞台化、複数の作品をコラージュした舞台化等、多様なパターンがあることが確認できた。また多和田の活動については、朗読にパフォーマンスが加わるとともに、インスタレーションにも取り組んでいることが確認できた。以上から、鑑賞者の知覚や認識に訴えかける表現手法が多和田文学においてますます重要な位置を占めるようになったと結論した。

研究成果の概要(英文)：I conducted a research survey of staged works written by Yoko Tawada and her activities such as readings, performances with the pianist and installations in order to clarify how important "dramatic element" is in Tawada's literature. As for putting Tawada's works on the stage, the results show that there are rich various patterns of original works, not only dramas but novel or collage of some works. As for Tawada's activities, the results show also in late years her readings add theatrical elements and she began to play installations arts. From these viewpoints, the study concludes that the style that works upon viewers' feelings and recognitions becomes increasingly become increasingly to occupy an important place in Tawada's literature.

研究分野：日本文学

キーワード：多和田葉子 戯曲 朗読 パフォーマンス インスタレーション

1. 研究開始当初の背景

(1) 多和田葉子は1987年に第一著作集である日独二ヶ国語の詩文集『Nur da wo du bist da ist nichts あなたのいるところだけ何もない』を刊行して以降、ドイツを拠点に日独二ヶ国語で旺盛な創作活動を展開し、日本でもドイツでも各20冊以上の著書を刊行している。その文学的評価は世界的に高く、日本では芥川賞、読売文学賞等、ドイツではシャミッソー賞、クライスト賞等を受けている。翻訳状況に関しても各言語に訳されている。こうした国際的な評価と連動する形で、研究も日本とドイツを中心に世界各国で進められてきている。単独の論文はもとより、雑誌の特集が生まれ、また論文集としても、Doug Slaymaker 編『Yōko Tawada : voices from everywhere』(Lexington Books, 2007年)等が刊行されている。

(2) 多和田葉子はデビュー直後から朗読という営為に取り組み始め、研究開始当初においては毎年世界各地で多和田の朗読会が開催されていた。またピアニスト高瀬アキとの朗読と音楽のコラボレーションのパフォーマンスも開始から10年目を迎え、ドイツ、日本、アメリカで公演されていた。しかしながら、上記のような評価と研究の動向にもかかわらず、多和田文学の戯曲、及び演劇化に関しては十分に研究がなされてこなかったという状況にあった。さらに朗読やパフォーマンス、インスタレーションなどの多和田の広義の演劇的活動についての研究は見当たらなかった。

2. 研究の目的

(1) 第一の目的は、多和田葉子の作品の演劇化の展開とその意味を明らかにすることにある。

(2) 第二の目的は、多和田本人による広義の演劇的行為、すなわち朗読会やパフォーマンス、インスタレーションといった活動の展開とその意味を明らかにすることにある。

3. 研究の方法

(1) 多和田葉子の文学を原作とした演劇化の状況調査に関して、研究期間中に開催された公演を対象に実地調査を、また過去の公演に関しては文献調査をそれぞれ行った。出演者、演出、会場などの基本情報の収集や原作との比較検討を行った。

実地調査を実施したのは、「白熊のトスカ」(2012年、劇団らせん館)、「夕陽の昇るとき～STILL FUKUSHIMA～」(2014年、同前)、「サンチョパンサ宣言」(2016年、同前)、「ペルソナ」(2016年、鳥公園)等である。

(2) 多和田葉子本人による広義の演劇的活動に関して、研究期間中に開催された朗読会、パフォーマンス、インスタレーションを対象

に実地調査を、過去の公演に関しては文献調査をそれぞれ行った。

実地調査を実施したのは、高瀬アキとのパフォーマンス「変身」(2012年)、同「魔の山」、同「白拍子 VS 変拍子」(2014年)、同「猫も杓子もカントル」(2015年)、同「絵師 葛飾北斎」(2016年)、「POESIE-EIN FEST IM HEINE HAUS」(2013年)、「さいたまトリエンナーレ」(2016年)等である。

(3) 多和田葉子、並びに多和田文学の演劇化の活動を続けている劇団らせん館の演出家嶋田三朗氏、同俳優の市川ケイ氏、とりのかな氏らにインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 多和田文学を原作とした公演、並びに多和田本人の演劇的活動に関するデータベースを作成し、その成果に基づき、講談社文芸文庫『飛魂』、同『かかとを失くして他』収録の年譜や書誌を作成した。前者では2012年までの動向を、後者では2013年までの動向を跡付けた。以降の調査についても逐次整理を進めており、2017年刊行予定の同文庫で公表する予定である。

(2) 多和田文学の演劇化に関する調査結果では、戯曲の舞台化のみならず、小説を原作とした舞台化、複数の作品をコラージュした舞台化等、多様なパターンがあることが確認できた。

(3) 多和田本人の広義の演劇的活動については、作品テキストを声を出して読み上げる、通常よく見られるような朗読行為にとどまらず、そこに多様なパフォーマンス的行為、すなわちピンポン玉をピアノに投げ入れて不規則な音を故意に生み出そうとする行為や紙を次々に舞台から落としていく行為等が加わってきていること、またインスタレーションアートにも取り組んでおり、より活動の幅が広がっていることが確認できた。

(4) 作品とその上演の個別的な研究では、戯曲「夕陽の昇るとき～STILL FUKUSHIMA～」のケースを取り上げた。

震災や原発事故をめぐって人々に内面化された見えない境界線を言葉の力で炙り出し、鋭く告発する戯曲であることを論じるとともに、空間領域に関わる各語を強調したり、「ラ」音を「R」音で発声したりといった俳優の発声がこの戯曲の公演で高い効果をあげていることを明らかにした。

劇団らせん館へのインタビュー調査を実施し、紐や紙を用いた舞台装置の意味について何うとともに、実際にそれらを手にとり見学する機会を得た。本戯曲では、指示語や指示代名詞を繰り返し用いながら、見えない境界線が何重にも引かれる。話し手

が、自分の領域と原子力発電所、もしくは原発事故によって引き起こされる事態との距離をはかり、何重にも見えない境界線を自ら引きながら語る。このような戯曲の境界線の描かれ方の意図を汲み取った舞台装置であると論じた。

「夕陽の昇るとき～STILL FUKUSHIMA～」と多和田のパフォーマンスとの関連を確認した。具体的には、ジャズピアニストの高瀬アキとの共演パフォーマンスについて、黴菌のように見えない放射能の恐怖を、「菌」と禁止の「禁」をかける言葉遊びを通して表現した「菌じられた遊び」(2011年)、カフカの「変身」を下敷きにして、目覚めると突然虫に変身していたザムザのように突然放射能の恐怖に見舞われる事態をテーマにした「変身」(2012年)、震災後の福島と外界から遮断されたサナトリウムを重ねる「魔の山」(2013年)との共通する問題意識を浮かび上がらせた。多和田文学において、福島第一原発事故後の日本を描く試みは作品集『献灯使』の表題作が知られているところであるが、パフォーマンスにおいても同じ問題意識の発現が認められることが確認された。それによって小説や詩という形に加えて、演劇やパフォーマンスという形を通してこの問題を表現する作家の姿勢が確認できる。

(5) インスタレーションに関する調査を踏まえた具体的分析では、デュッセルドルフのハイネ・ハウスで行われた、高瀬アキとのパフォーマンスについて取り上げた。

書籍を用いたインスタレーションのありかたが多和田文学において初期から一貫する、文字や言語、本というものの自在なありようと響き合うものであるという結論を得た。

会場となったハイネ・ハウスについて調査し、ノルトライン＝ヴェストファーレン州とハインリッヒ・ハイネ協会の協力によりハイネの生家跡が記念のため保存され、2006年からは「ハイネ・ハウス」として、文芸書を扱う書店でもあり、文学カフェとして文学、芸術、文化の催しを行う場でもあることを確かめた。こうしたドイツの文化政策と多和田のパフォーマンスとの関連への考察へと進み、書籍を用いたインスタレーションを背にして行われた、多和田と高瀬のパフォーマンスは、聴衆に言葉と音のもたらす快楽を体感させ、歴史的建造物を「文化財」ではなく、現代に生きる場として創出する営みとして、ハイネ・ハウスをめぐる文化政策に沿うものであると捉えた。

(6) 作家本人を講師として招き、公開講演会を企画・運営した。「事件」や「魚説教」の朗読を交じえながら、本という不思議な

動物 との関わりから作家多和田葉子の歩みについて講演いただき、創作における朗読という営為の意味についても来場者とともに考える場となった。聴衆を対象としたアンケートを実施し、その分析から黙読では味わうことのできない音の響きやリズム、また絵を用いたパフォーマンスを組み入れた朗読の在り方が聞き手に与える効果について確認できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

谷口幸代、多和田葉子氏公開講演会、グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信平成27年度成果報告書、2016、49-50

谷口幸代、多和田葉子の文学における境界「夕陽の昇るとき～STILL FUKUSHIMA～」を中心に、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報、査読無、11号、2015、55-64、<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/57237>

〔学会発表〕(計2件)

谷口幸代、多和田葉子の文学における境界「夕陽の昇るとき～STILL FUKUSHIMA～」を中心に、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター主催国際日本学シンポジウム、2014.7.6、お茶の水女子大学(東京都)

〔図書〕(計4件)

谷口幸代 他、講談社、かかとを失くして・三人関係・文字移植、2014、253(224-248、250-253)

谷口幸代 他、講談社、飛魂、2012、265(250-261、263-265)

谷口幸代 他、翰林書房、渡航する作家たち、2012、223(173-182)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 幸代 (TANIGUCHI, Sachiyo)
お茶の水女子大学・グローバルリーダーシ
ップ研究所・准教授
研究者番号：50326162

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：

(4) 研究協力者

なし ()